

令和 7 年度

**「運営に関する計画・自己評価(最終評価)」
及び「学校関係者評価報告書」**

大阪市立滝川小学校

令和 8 年 3 月

1 学校運営の中期目標

現状と課題

本校では、「一人一人が大切にされる学校づくりをめざす」という学校教育目標をかかげ、「自己有用感の向上」「個別最適な学び」をめざす取り組みを進めてきている。

【安全・安心な教育の推進】

「一人一人が大切にされる学校」を実現するために、一人一人の子どもが学級、学校を自分の居場所だと感じ、遠慮なく自分の思いを表現できる場になるように、様々な教育活動に取り組んでいる。

令和 6 年度末学校生活アンケートでは、「学校生活は楽しい」の設問に対して肯定的な回答をした児童の割合が 87%と昨年度末より 1 ポイント下がった。自己有用感の指標となる「自分にはよいところがあると思う」の設問に対して肯定的に回答する児童の割合は 83%で、これは 1 ポイント上がっている。学校生活の中で、自分らしさを発揮し、集団の中で認められる経験を増やし、新しい課題に挑戦していこうとする意欲を十分に育て切れていない。

今年度も「いいとこみつけ」を積極的に活用し、多くの教員が子どものがんばりをたくさん認めていくことにより、子どもが「学校は楽しい」と感じているかを大切にしたい取り組みを進めたい。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

「一人一人が大切にされる学校」の実現に向けて、個別最適な学びにつながる様々な教育活動に取り組んでいる。

ここ数年間にわたって「全国学力・学習状況調査」や「大阪府すくすくウォッチ」「大阪市学力経年調査」等の学力に関する調査において安定して高い水準の成果が出ている。そこで「大阪市学力経年調査」では同一母集団の学力水準を維持しながら、一人一人の子どもの強みを伸ばし、弱みを克服していく取り組みを進めていく。そのために観点別学習評価の取り組みを継続し、個の伸長に効果的な支援のあり方を探るとともに、知的好奇心を揺さぶる授業改善に努めていきたい。

また、総合的読解力プログラムを試行する元となる力を見取る設問となる「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を伸ばしていくことが必要である。

学習基盤の一つ「情報活用能力」の育成については継続して取り組んでいく。そのために、学習者用端末の積極的な活用を研究テーマとして、学校全体で取り組む。

体力については、「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」や校内調査の結果からは、全体的な測定値の低下、体力の二極化など多くの課題が表れている。このような課題を解消するために、教科体育の充実や運動遊びの活性化などに取り組んでいきたい。

また、保健指導、栄養指導、ガッツ週間の取り組みを通して児童の生活習慣の改善に向け引きいて取り組みを進めていくことが大切である。

【学びを支える教育環境の充実】

「教員の働き方改革」については、校務支援システムや学習者用端末の活用を引き続き進めていく。加えて「教育D X」を推進していくために、I C T環境の整備にとどまることなく、児童の学び方や先生の働き方が生まれ変わるような方策についても抜本的な検討が必要な時期に来ていると考えている。

また、生涯学習の基礎となる読書習慣の形成にも努めていきたい。

※教育D X…デジタル技術を活用して教育のあり方を改革する取り組み。

中期目標

【安全・安心な教育の推進】

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を70%以上にする。
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を50%以上にする。
- 学校生活アンケート「I C T機器を使って、自分やグループの考えを伝えることができた」に対する肯定的な回答する児童の割合を75%以上にする。
- 学校生活アンケート「学校は情報や情報手段を主体的に選択し、活用していく力（情報活用能力）の育成に努めていると思いますか」の設問に対して肯定的に回答する保護者の割合を80%以上にする。
- 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を70%以上にする。
- 小学校学力経年調査の児童質問紙「読書は好きですか」の問いに対し、肯定的に回答する児童の割合を70%以上とする。

【学びを支える教育環境の充実】

- 教育の質の向上を図るために学校課題や児童の情報等を教職員で情報共有するシステム（いいところみつめ・心の天気・いじめアンケート・学習のふりかえり）を有効に活用していると回答する教員の割合を90%にする。
- 仕事と生活の両立の調和（ワークライフバランス）を可能とする働きやすい環境を整備し、基準2（1年間の時間外勤務時間が720時間以下。時間外勤務時間が45時間を超える月数6以下。時間外勤務時間が100時間を超える月数が0。直近2～6か月の時間外勤務時間の平均が80時間を超える月数0）を満たす割合を50%以上にする。

2 中期目標の達成に向けた年度目標

【安全・安心な教育の推進】

- 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を70%以上にする。
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。
- 学校生活アンケート「相手を思いやる言葉づかいをするようにしている」に対して肯定的回答する割合を80%以上とする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を50%以上にする。
- 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も現状値以上をめざす。
- 小学校学力経年調査における「理科の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を78%以上にする。
- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を81%以上にする。
- 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を60%以上にする。
- 学校生活アンケート「ICT機器（パソコン・タブレット・カメラ・大型モニターなど）を使って、自分やグループの考えを伝えることができた。」に対して、肯定的回答する割合を児童75%以上にする。
- 学校生活アンケート「学校は情報や情報手段を主体的に選択し、活用していく力（情報活用能力）の育成に努めていると思いますか。」に対して、肯定的に回答する割合を保護者80%以上にする。

【学びを支える教育環境の充実】

- 教育の質の向上を図るために学校課題や児童の情報等を教職員で情報共有するシステム（いいところみつけ・心の天気・いじめアンケート・学習のふりかえり）を有効に活用していると回答する教員の割合を80%にする。
- 仕事と生活の両立の調和（ワークライフバランス）を可能とする働きやすい環境を整備し、基準2（1年間の時間外勤務時間が720時間以下。時間外勤務時間が45時間超える月数6以下。時間外勤務時間が100時間を超える月数が0。直近2～6か月の時間外勤務時間の平均が80時間を超える月数0）を満たす割合を40%以上にする。
- 小学校学力経年調査の児童質問紙「読書は好きですか」の問いに対し、肯定的に回答する児童の割合を70%以上とする。
- 授業日において、80%以上の学習者用端末を活用した日数を、年間80%以上にする。

(様式 2)

大阪市立滝川小学校 令和 7 年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成 状況
【安全・安心な教育の推進】 ○ 小学校学力 経年調査 における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 70% 以上にする。(R6:56.3%) ⇒79.3% ○ 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。(R5:0.5% R6:1.0%) ⇒1.9% ○ 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。(R5:2 人 R6:0 名) ⇒4 名中 2 名で・・・→50% ○ 学校生活アンケート「 <u>相手を思いやる言葉づかいをするようにしている</u> 」に対して肯定的回答する割合を 80%以上とする。(R6:83%) ⇒94.3%	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進 捗 状 況
取組内容① 【施策 1 安全・安心な教育環境の実現 基本的な方向 1 2-1 道德教育の推進】 ○ 他者（人・もの・できごと）を大切にし、相手を思いやる言葉づかいをする。 指標 ○ 毎週金曜日のたてわり班活動、わくわくタイム（毎週水曜日の低学年、毎週木曜日の高学年）の活動を通して、相手を思いやりたり敬ったりする気持ちを高める。 ○ 異学年とのたてわり班活動を通して、下級生への心情を育み、自己肯定感を高める。 ○ 学校生活アンケート「 <u>ふれあい班活動やスマイルタイムを通して、友だちを大切にし、やさしく接することができた</u> 」に対して最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 80%以上とする。 ⇒94.3%	A
取組内容② 【施策 1 安全・安心な教育環境の実現 基本的な方向 2 2-1 不登校への対応】 ○ 不登校児童の登校支援に取り組む。 指標 ○ 不登校傾向が見られる児童への早期対応を組織的に行う。 ○ 心の天気やミマモルメを活用し、欠席、遅刻、行きしぶりの児童について情報共有をする。	B

取組内容③【施策1 安全・安心な教育環境の実現 基本的な方向2 2－3人権を尊重する教育の推進】		B
○ 幼児・児童の発達や学びの連続性をふまえ、併設幼稚園がある利点を生かし、園児を思いやる心を育てる活動を行う。		
指標		
○ 発達や学びの連続性を見通した学習計画を構築し、学年ごとに、以下の取り組みを行う。		
1年	スマイルタイム・3月 もうすぐ1年生	
2年	スマイルタイム・2月 おもちゃランド（滝川っ子まつり）	
3年	スマイルタイム・5月 春みつけ学習	
4年	スマイルタイム・10月 うたう会	
5年	スマイルタイム・7月 ふれあいプール	
6年	スマイルタイム・6月 スマイルタイム DX	
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析		
① 相手を思いやる言葉遣い		
学校生活アンケート「相手を思いやる言葉づかいをするようにしている」に対して肯定的回答する割合が94.3%と目標を上回った。		
わくわくタイムやふれあい班活動など、異学年との関わりを多く持つことができた。それぞれの遊びを通して、上の学年が下の学年に声をかけたり、手をかしたりするなど優しい心が育ってきた。後期は、わくわくタイムにおいて一緒に活動する学年の組み合わせを変え、さらに交流を深めた。		
今年度のわくわくタイムは学年の組み合わせを変えるなどの工夫も行われて異学年交流を活発に行うことができた。		
② インクルーシブ教育		
全教員がミマモルメ（欠席等連絡アプリ）を見ることができるようになったことで、欠席の状況や理由を把握しやすくなった。また、いいところみつけや児童理解（報告）を通して不登校児童の状況を共有することができた。家庭と電話連絡などで繋がりを持ち続けるとともに、SC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）と情報共有することで関係機関（放課後等デイサービスやフリースクール、医療機関）へ繋ぐことができている。		
通級による指導の開設によって、不登校児童の受け皿が一つできた。しかし、ケース会議を開いたり、ソーシャルワーカーが役割を果たしたりといった、学校全体が組織的にできているかは、よく見えない。適時、不登校児童の情報共有は行われている。		
③ 幼小交流		
学年ごとに幼稚園児との取り組みを行うことができた。声のかけ方や目線の合わせ方を考えることができた児童が多くいた。また、交流後に園児からお礼の手紙をもらう等のふれあいもあり、児童にとってよい経験となった。		

今後の改善点

① 相手を思いやる言葉遣い

アンケートでは高い数値が出ているが、実態としては相手を思いやる言葉遣いができていない児童が多いように感じる場面が多かった。同学年の児童にもやさしい言葉遣いができるように、学年に応じて指導を継続していく。来年度のわくわくタイムでは、新しい遊びを加え、改善を加えながら交流できるようにする。また、集会活動が定刻で終わることができるように内容や活動量を見直しつつ継続していく。

② インクルーシブ教育

不登校児童に対する組織的な取り組みが行われている（SC、SSW などとの情報共有）と聞いてはいるが、それが具体的にどのような内容でどの児童を対象に行っているのかを共有できていないこともあるので、来年度は、それらの情報を共有する手段が必要である。生活指導部とも連携をとって対応していく。

③ 幼小交流

年間計画通り実施できているが、活動の意味をきちんと理解できていない児童もいたので、事前に指導して取り組むことが必要である。

大阪市立滝川小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【未来を切り拓く学力・体力の向上】 ○ 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を50%以上にする。(R6:38.6%) 38.6% ○ 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も現状値以上をめざす。 (国語 4年 1.04→0.99▼ 5年 1.09→1.05▼ 6年 1.08→1.07▼) (算数 4年 0.96→1.03△ 5年 1.15→1.20△ 6年 1.18→1.01▼) ○ 小学校学力経年調査における「理科の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を70%以上にする。(R6:77.3%) 85.9% ○ 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を60%以上にする。(R6:80.9%) ○ 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を60%以上にする。(R6:65.8%) 66.8% ○ 学校生活アンケート「ICT機器(パソコン・タブレット・カメラ・大型モニターなど)を使って、自分やグループの考えを伝えることができた。」に対して、肯定的に回答する割合を児童75%以上にする。(R6:81%) ⇒79.2% ○ 学校生活アンケート「学校は情報や情報手段を主体的に選択し、活用していく力(情報活用能力)の育成に努めていると思いますか。」に対して、肯定的に回答する割合を保護者75%以上にする。(R6:84%) ⇒87.2%	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【施策1 誰一人取り残さない学力の向上 4-2 主体的で対話的で深い学びの推進】 ○ 情報活用能力の育成を図る授業を土台にして、AARサイクルの過程の中で子どもが自ら学びを調整し、継続的に自らの思考を改善できるような学習指導のあり方の研究に取り組むことで、主体的・対話的で深い学びに迫る授業スタイルを構築する。 指標 ○ 学校生活アンケート「ICT機器(パソコン・タブレット・カメラ・大型モニターなど)を使って、自分やグループの考えを伝えることができた。」に対して、肯定的に回答する割合を児童75%以上にする。 ⇒79.2% ○ 学校生活アンケート「学校は情報や情報手段を主体的に選択し、活用していく力(情報活用能力)の育成に努めていると思いますか。」に対して、肯定的に回答する割合を保護者75%以上にする。 ⇒87.2%	B

取組内容②【施策3 誰一人取り残さない学力の向上 4-2 主体的で対話的で深い学びの推進】	
○ 観点別単元評価を充実することで、指導と評価の一体化を推進し、児童の学習改善、教員の授業改善につなげていく。	
指標	
○ 教員への質問紙調査「観点別単元評価を基に児童の学習状況を把握し、授業改善に生かしたか」に対して、肯定的回答する割合を 80%以上にする。⇒84.6% ・授業や単元全体における児童の記述や発話、実演等から、目的や課題に応じて様々な資質能力を発揮し、課題解決する姿を見取り、児童全員について毎月1つ以上「いいところみつけ」に入力する。⇒肯定的43%、否定的57% ・ICTを活用し、観点別単元評価表をもとにデータ分析、することにより、児童の学習の状況を把握し、児童の学習改善、教員の授業改善に生かす。⇒86%	B
取組内容③【施策4 健やかな体の育成 5-1 体力・運動能力向上のための取り組みの推進】	
○ 運動量を増やす授業づくりを推進するとともに、主体的に運動する習慣を身につける手立てを工夫し、体力向上を目指す。	
指標	
○ 体力テストの50m走、シャトルラン、ソフトボール投げにおいて、男女共に年度当初の数値より向上させる。(4月・11月に2回実施) 3つの種目のうち、1つ以上の種目について、4月当初より記録が向上した児童の割合を 50%以上にする。 50Mm走 男子70% 女子63% シャトルラン 男子46% 女子46% ソフトボール投げ 男子57% 女子42% ・体育の時間に、記録を伸ばすための体づくり運動に取り組む。 ○ 外遊びを増やす手立てを工夫する。 ・〇〇運動場遊び名人 (年5回) ・運動遊び集会 (わくわくタイム)、縄跳び集会 (ガッツ週間にあわせる。)	B
指標	
○ 学校生活アンケート「 <u>早寝をしている</u> 」「 <u>早起きをしている</u> 」「 <u>朝ごはんを食べている</u> 」に対して、肯定的回答する割合を児童 85%以上にする。 <u>早寝をしている76%</u> <u>早起きをしている83.7%</u> <u>朝ごはんを食べている95.5%</u> ・保護者が参観できる機会を活用し、情報モラル教育、保健の授業等を通して、生活習慣について家庭との連携を図る。 ・学期に1回 (6月、10月、1月)、ガッツ強調週間を設け、規則正しい生活について振り返る。(適切なスクリーンタイムを重点目標に掲げる。)	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
① 授業スタイルの構築 学校生活アンケート「ICT 機器（パソコン・タブレット・カメラ・大型モニターなど）を使って自分やグループの考えを伝えることができた。」に対する肯定的回答の割合は児童 79.2%、学校生活アンケート「学校は情報や情報手段を主体的に選択し、活用していく力（情報活用能力）の育成に努めていると思いますか。」に対する肯定的回答の割合は保護者 87.2%である。 アンケート結果からもわかるように、情報活用能力の育成を図る授業を土台にして、AAR サイクルの過程の中で、子どもが自ら学びを調整し、継続的に自らの思考を改善できるような学習指導のあり方の研究に取り組むことで、主体的・対話的で深い学びに迫る授業スタイルを構築することができている。 ② 観点別単元評価 教員への質問紙調査「観点別単元評価を基に児童の学習状況を把握し、授業改善に生かしたか」に対する肯定的回答の割合は 84.6%、「授業や単元全体における児童の記述や発話、実演等から、目的や課題に応じて様々な資質能力を発揮し、課題解決する姿を見取り、児童全員について毎月 1 つ以上「いいところみつけ」を入力する」に対する肯定的回答は 43%であった。 観点別評価については、指導と評価の一体化を目指し、児童の学習状況の把握に生かすことができたが、児童の学習改善、教員の授業改善に生かすことができているかについては、教員間で差がある。また、「いいところみつけ」の活用についても、授業や単元全体における児童の記述や発話を入力することで児童の学習状況の把握に活用できた教員もいるが、授業改善に生かす手段としては否定的回答が多い。 ③ 運動能力向上 体力テストは、50m 走においては、男女ともに年度当初の数値より向上させることができた。また、たてわり班でのわくわくタイム、遊び名人、縄跳び集会を計画的に実施することができ、ガッツ週間に合わせて行った体育館遊びにも多くの児童が参加した。 ④ 早寝・早起き・朝ごはん 学校生活アンケート「早寝をしている」に対する肯定的回答は児童 76%、「早起きをしている」に対する肯定的回答は児童 83.7%である。学期に 1 回（6 月、10 月、1 月）のガッツ週間や、健康面や安全面、生活リズムの重要性をテーマにした学校保健委員会（2 月）を実施し、家庭との連携を試みた。また、情報モラル教育、保健の授業を参観で行うことで、スクリーンタイムの見直しなど規則正しい生活について、家庭との連携を図った。3 学期のガッツ週間の結果では、早寝に対する目標をクリアできた児童の割合は前年度と比較して増加している。 「朝ごはんを食べている」に対する肯定的回答は児童 95.5%であり、栄養指導や保健・家庭科の学習、食育だよりによる家庭への啓発により、意識が定着している。
今後の改善点
① 授業スタイルの構築 学年の発達段階に応じた情報活用スキルを明確にし、情報活用能力の育成を図る。授業では、ICT 機器を効果的に活用し、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりする」場を多く設けるようにする。今年度の研究の成果や課題を生かし、AAR サイクルの過程の中で子どもが自ら学びを調整し、継続的に自らの思考を改善できるような学習指導のあり方の研究に継続して取り組む。 ② 観点別単元評価 観点別単元評価の観点設定を更新し活用することで、今後も指導と評価の一体化を推進し、

児童の学習改善、教員の授業改善につなげていく。「いいところみつけ」については児童の状況を把握、教員間で共通理解するための手段として活用していく。

③ 運動能力向上

今後も運動の機会を増やす場を設け、体力向上へとつなげる。また、児童の実態に合わせて体力テストの目標項目を検討し、体育の授業の中でその力を高める運動を取り入れていく。

④ 早寝・早起き・朝ごはん

「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムの改善については、家庭との連携が必要であるため、学年だよりへ記載したり、学校保健委員会や授業参観（情報モラル教育、保健、家庭科など）で保護者が参加できる機会を活用したりして、家庭への啓発を行う。

(様式2)

大阪市立滝川小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【学びを支える教育環境の充実】 ○ 教育の質の向上を図るために学校課題や児童の情報等を教職員で情報共有するシステム(いいところみつけ・心の天気・いじめアンケート・学習のふりかえり)を有効に活用していると回答する割合を60%にする。(R6:91%) ⇒ 86% ○ 仕事と生活の両立の調和(ワークライフバランス)を可能とする働きやすい環境を整備し、基準2(1年間の時間外勤務時間が720時間以下、時間外勤務時間が45時間を超える月数6以下、時間外勤務時間が100時間を超える月数が0、直近2～6か月の時間外勤務時間の平均が80時間を超える月数0)を満たす割合を40%以上にする。(R6 基準1:31.0% 基準2:75.8%) 基準2 ⇒ 91% ○ 令和6年度小学校学力経年調査の児童質問紙「読書は好きですか」の問いに対し、肯定的に回答する児童の割合を70%以上とする。(R6:75.4%) 70.1%	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【施策1 教育DXの推進 6-1 ICTを活用した教育の推進】 ○ 教育の質の向上を図るために学校課題や児童の情報等を教職員で情報共有するシステム(いいところみつけ・心の天気・いじめアンケート・学習のふりかえり)を有効に活用する。 ----- 指標 ・心の天気の入力に応じた声掛けをし、いいところみつけを日々入力することで、懇談会や成績入力などに役立てる。それらを児童理解に活用した、というアンケートの肯定的回答を70%以上にする。 ⇒ 87% ・月一回以上は「いいところみつけ」に、児童の様子、教職員に周知すべき事柄、次年度以降に引き継ぐ内容、懇談会で伝えたいことなどを入力する。 ⇒ 43% ・授業日において、児童が学習者用端末を活用した日数が、教員それぞれの授業時数の80%以上にする。 ⇒ 86%	B
取組内容②【施策2 生涯学習の支援 8-3 学校図書館の活性化】 司書と連携し、学校図書館の活性化を図る。 ----- 指標 ・年度当初と、年度末に学校アンケート「 <u>読書をするのが好きですか</u> 」というアンケートを実施し、肯定的に回答する児童の割合を75%以上にする。 ⇒ 75.7% ・図書館開放を毎日、学級借り出しの交換を月1回以上行い、児童が多くの本に触れられる環境を整える。 ・図書委員会による「ミニビブリオバトル」おすすめの本の紹介コーナー設置等の取り組みを行い、児童が今まで関心のなかった分野や新しい分野に興味をもち、本を読むことが好きになるような活動を取り入れる。	B

取組内容③【施策3 人材確保・育成としなやかな組織づくり 7-1 働き方改革の推進】 ○ 仕事と生活の両立の調和（ワークライフバランス）を可能とする働きやすい環境を整備し、基準1を満たす割合を40%以上にする。⇒41%	
指標	
・会議の精選は続け、さらに、研究授業のあり方を工夫し、準備や討議にかかる時間を短くしながら質を高める。そして、基準1（月の時間外勤務が45時間を超える月が0、尚且つ年間時間外勤務が360時間以下）を満たす教職員の割合を35%以上（R6年度：31.0%）にする。⇒ ・基準2に関しては75%以上達成を継続する。（R6年度：86.2%）⇒91%	B
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析	
① ICTを活用した教育 「いいとこみつけを入力し、日々活用したか」という「アンケートでは、肯定的回答が86%であり、目標数値の70%を上回っている。しかし、「いいとこみつけを月一回入力したか」には肯定的回答は43%であり、半分以下である。これは、入力回数が少ないが、入力されたものは活用できた、と読み取れる。 いいとこみつけの入力頻度には大きな差が生まれたままである。入力された情報は、情報共有に役立ち、とくに当該児童の担任以外が状況を把握する際、有益であった。 「児童の端末を利用した日数が、授業日の80%以上にする」とのアンケートには、89%の職員が達成できたと回答した。 ② 学校図書館の活性化 「読書は好きですか」の肯定的回答が75.5%と、目標数値の70%を超えている。 図書館開放は、図書館司書のいないときには図書委員によって行われている。加えて、北校舎の読書スペースを活用する児童が増えたり、図書委員会による本の入れ替えも頻繁に行われていたり、児童が読書をしやすい環境が整ってきているといえる。 また、地域のボランティアやPTAによる読み聞かせも、児童の興味を引くことができていた。 百人一首大会も行われており、図書室に行く動機づくりに一役買っている。 半面、いまだ「どの本を読めばいいかわからない」という児童もおり、読書につなげるためのさらなる工夫が必要でもある。 ③ 働き方改革の推進 基準1の数値は41%で、目標数値の40%を上回っている。また、基準2の数値は、91%で、目標数値の75%を上回っている。また、前年度と同母集団で比較すると全体の時間外勤務時間は10%減少させることができた。 5時以降の留守番電話による対応、ゆとりの日や退勤時間の明示などにより、計画的に仕事を行うめどが立ちやすくなり、時間外労働の減少に影響があった。また、研究授業の形態を変えたことにより、授業準備に過剰な時間をかけることは減ってきた。 会議の精選により会議は減ったが、そこに至る校務分掌部会が増えた部会もある。また、担当する役割によって業務量の差が大きいところがあり負担に偏りがある。 数値に現れない残業として、持ち帰り仕事は今も続いている。時期による面もあるが、19時や20時まで勤務している姿も散見される。 教職員組織の若返りが進んでおり、仕事の見通しが十分に持てず効率的に業務にあたれ	

ていない場合もある。学校全体で取り組むべき環境整備、仕事の総力を減らすなどの工夫は確実に進み時間外勤務は年々減っているが、それが見えにくいと感じている教職員もいる。

今後の改善点

① ICT を活用した教育

端末の使用率が上がるに沿って、情報モラルもしっかりと身に着けさせる必要がある。学習者用端末を借りているという意義、共同編集でのマナー、インターネットにある情報の真偽や著作権などとの兼ね合いなど、発達段階に応じて指導していく必要がある。

児童教員ともに、ICT 機器の活用に対するハードルを下げるため、それぞれの行ってきた取り組みの共有や、技術や活用場面の教え合いなどを行う。

いいところみつけは、入力することで情報共有に役立ったという面もあるが、負担感が大きい面もある。入力ハードルを下げる手立てが必要といえる。

② 学校図書館の活性化

取り組みが効果を表しているので、取り組みを継続する。

その取り組みで意欲の向上が見られない児童に対する手立てとしては、読んでみたい本のアンケートを取ったり、季節や学習に適した本を購入したりすることで、読もうとする気持ちを作り出すことも考える。また、75%という数値目標が適切かどうか、もう一度考える。

③ 働き方改革の推進

校務分掌部会の負担を減らすための工夫をする。この数年で学校行事の精選は大きく進んだが、教育ニーズの増加もあり、準備にかかる時間と労力を負担に感じている教職員もいる。そこで PDCA サイクルの中の P(計画)を管理職や中堅教員が中心となり組織的に見通しをもってスムーズに準備ができるようにする。また、教育効果を維持しつつも効率化できることや、削減できることがないかも見直していく。

ゆとりの日や、退勤時刻を決める日の設定は効果があるので継続する。

研究授業は、前年度以前と比べると回数が減り、それに伴い指導案検討会等も減り教員の仕事量を減らすことにつながった。しかし、研究授業や研修会は教員の指導力の向上の機会となるもので、それが長期的に見て働き方改革に繋がる側面もある。今の回数を維持しつつも、1つ1つの研究授業や研修会がより充実するようにしていく。

また、担当する役割によつての業務量の差が大きくなるように、組織のバランスについても検討する。